

株式会社 SUBARU 代表取締役社長 CEO 中村 知美

私共 SUBARU は、本日 2023 年 3 月 3 日に開催されました取締役会において、ニュースリリースでお知らせしている通り、社長人事を内定いたしました。

これは、2018 年に策定した中期経営ビジョン「STEP」5年間の区切り・総括とともに、現在社内にて議論を進めている、これからの時代の変化に適応する新しい経営ビジョンの策定・展開に向けて、社長交代を含めた新たな経営体制へ移行させることを目的としたものです。

私自身は、2018 年の就任以来、コーポレートガバナンスの強化、品質改革、組織風土改革、トヨタ自動車さんとの関係強化、そして SUBARU ブランド の価値向上を重点ミッションに据えてやってまいりました。

自己評価になりますが、着実にその成果がでてきている、との手ごたえを感じております。また社員の意識改革や行動改革も進んできたと感じています。

例えば、品質改革でいえば、市場措置の件数、台数ともに減少傾向にあり、また迅速な原因究明や対策ができる設備や組織体制を構築し、費用面での抑制効果も確実に出ていますと認識しています。また、お取引様も含めた開発の上流からの「生まれの品質改革」も着実に進捗しています。あとは市場での評価、お客様や販売店さんにその成果を感じていただけるよう、引き続き推進してまいります。

もうひとつ、意識改革・行動改革が進んでいると申し上げましたが、社長就任以降、社内に向けて「意識を変え、行動を変え、会社を変える」というキーワードを言い続けてきました。品質改革の成果もそのひとつですが、前例踏襲ではなく、時代の変化に向けて果敢にチャレンジしてくれる、提案してくれる社員が増えてきたと感じています。「考え抜いて、行動をおこす」という風土が定着しつつある、と認識しています。

加えて、私が重点ミッションに据えて取り組んできたこれこそが、SUBARU として守るべき大事な領域だと共感してくれて、今後もブレないで推し進めてくれる後継者人材も育ってきました。まさに新しい社長によって、新たな変化や刺激を会社にもたらし、組織の活性化を促し、変革をさらに推し進める時と判断しました。

この 5 年間は、完成検査問題からの信頼回復への歩み、コロナ禍での対応、そして今なお継続している半導体をはじめとする部品供給課題など、激動のなかでの経営舵取りでありました。後任にバトンを渡すにあたっては「不安定な状況のままでのバトン渡しはできない、経営として責任あるバトン渡しを」という思いでやってきました。

その意味では、外部環境も含めて一時期の最悪な状況からは脱しつつあり、会社の体質や利益構造にも改善の兆しが見えるこのタイミングが、バトンタッチにふさわしいのではないかとといった論点を踏まえて、特にこの一年間、社外取締役を含む役員指名会議で議論を深めてきました。そして、本日の取締役会決議、発表に至った次第です。

そして後任となる 大崎 ですが、元々はエンジン設計のエンジニア出身です。しかしながらその後のキャリアはとてもユニークで労働組合の専従役員、商品企画、品質保証、そして直近では製造部門と多種多様な部門を経験し、それぞれでしっかりと実績を出してきました。また現場を大切にす人物で、社内外からの人望が厚い人物です。当社で定める「あるべき CEO 像」に照らして、全ての要素においてその資質を実感できる人物だと考えています。

現在、そしてこの先も、クルマの電動化対応に留まらず、企業活動全体を通したカーボンニュートラルへの対応など、難しい舵取りが求められる時代は続くと思っております。私自身は執行の第一線からは一步引くものの、会長としてしっかりと新社長を見守り、支え、そして新体制を全力でサポートしていく所存です。

引き続き、皆さまからのご支援、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

(次ページへ続く)

本日の当社取締役会において、次期社長候補に指名された 大崎 篤 です。

私は、1988 年に富士重工業(当時、現・株式会社 SUBARU)に入社し、東京・三鷹にある東京事業所のエンジンの設計部門からキャリアをスタートさせました。実は大学の研究室で富士重工業から委託されたエンジンの研究をしていたことが縁で、入社を決めたと言う経緯です。その後トランスミッションの設計にも携わり、この間 10 年余りは、SUBARU 車のパワーユニット開発を通じ、モノづくりの難しさ、奥深さ、そして楽しさを味わい、学んだ期間でした。

その後、会社を休職して 8 年間にわたり、労働組合の専従役員に従事しました。時の経営陣と会社の抱える課題について激論を交わし、また人財が全ての基盤であるとの思いを強くしたこの期間は、私のキャリアの中でも特に貴重な経験だったと思っております。

会社に復帰後は、当時まだ新宿にあった本社にて、開発の最上流である商品企画部で先行企画業務に携わった後に、車両の開発部門がある群馬地区に異動し、車両開発の総責任者(PGM\*)を担いました。以降の経歴は、ニュースリリースに記載の通りです。

\*PGM:プロジェクトゼネラルマネージャー

最近では品質保証部門が長かった訳ですが、特に 2017 年に発覚した完成検査に関わる不適切事案の対応においては、本事案の調査、各種対応策や再発防止策の策定と実行、国土交通省への報告等に奔走し、以降は現社長の中村と共に、この問題の起因となった社内の「組織風土改革」や「品質改革」を強力に推し進めてまいりました。

直近では製造部門を担当し、これからの電動化の流れも踏まえた国内生産体制再編計画の策定と実行を主導し、現在に至ります。

さて、我々自動車業界にとって「大変革期」と言われるこのタイミングで、そして混沌とした予測不能な時代における経営の舵取りを、現社長の中村から引き継ぐことに、身の引き締まる思いで一杯ですが、先が見通し難いからこそ、地に足を付けて、軸をブレさせずに、前をしっかりと向いて、この重責を果たして行くことが、これからの私の仕事であると強く思っています。

そして、これまで商品開発の最上流からアフターサービスの領域に至るまで、モノづくりに関わる多くの部門に携わってきた経験から、私自身が常日頃から感じているのは、何より「現場が大事だ」と言う思いです。行き詰った時はいつも現場を訪れ、何かしらの答えに繋がるヒントを得てきました。「答えはマーケットにある」、「答えは生産や開発の現場にある」。常に現場に寄り添い、大事にしながら、当社のありたい姿である「笑顔をつくる会社」の具現化に向けて、経営の舵取りを進めたいと考えております。

また、現在の中期経営ビジョン「STEP」に続く、新体制における新たな経営ビジョンにつきましては、今後策定次第、あらためて皆様へお伝えするとともに、その実現に向けて取り組んでいきます。

最後になりますが、中村と共に進めてきた SUBARU ブランドとしての大きな方向性は堅持しつつ、新たな時代の新たな SUBARU づくりに向けて、新しい役員体制、全ての社員とともに着実に前進してまいります。

これからのご支援、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

以上